

資料解説

かながわ資料室所蔵の大山関係資料について

鈴木 めぐみ

はじめに

神奈川県立図書館かながわ資料室では、平成 23 年 2 月に県民公開講座「大山とその信仰～所蔵資料から～」を開催するにあたり、その準備作業として大山関係の所蔵資料の調査を行った。本稿は、平成 22 年 11 月時点での調査結果をまとめたものである。まずは大山の歴史を概観してみたい。

1 大山の歴史

大山（おおやま）は丹沢山地の東部、厚木市、伊勢原市、秦野市にまたがってそびえる標高 1200 メートルあまりの美しい山である。阿夫利（あふり）山、雨降山、大福山、如意山とも呼ばれ、古来より人々の信仰を集めてきた。まず山頂に巨大な自然石をご神体として祀った石尊社がつくられ、後に山の中腹に大山寺が建立され、山岳信仰をもととした修験道が盛んに行われた。

やがて武士の台頭に伴い大山寺はその保護下に入るが、鎌倉・室町・戦国と時代が過ぎるうち、修験者たちは徐々に武力を蓄えていった。しかし江戸時代になると徳川幕府の改革により、修験者たちは下山させられてしまう。彼らは大山の麓に居を構え、以後御師（おし）として、新たに宿坊・土産物屋経営や祈祷・檀家廻りなどの教宣活動を行って生活していくことになる。その結果門前町がつくられ、大山信仰は関東を中心に広い地域の庶民の間に広まっていった。

大山参詣は一般に大山講と称される集団での参詣が中心で、大山道と呼ばれる参詣道も次第に整備され、江戸時代中期・後期に最盛期を迎えることとなる。当時庶民が自由に旅することは許されていなかったが、信仰を目的とした社寺参詣や病氣治療のための湯治などは比較的認められやす

かったため、社寺参詣を名目に旅立ち、実際は参詣地以外の観光も兼ねる物見遊山の旅も多くみられた。江ノ島・鎌倉あるいは富士へと足を伸ばすこともあった。

安政元年（1854）の大山の大火、御師たちの白川神道、平田国学への入門と、幕末になると大山は徐々に不穏な空気に包まれていき、明治時代になるといわゆる神仏分離令を受け、廃仏毀釈の嵐が吹き荒れた。

山頂の石尊社を阿夫利神社本社とし、中腹の大山寺不動堂のあった場所に下社を建立する一方、大山寺の堂坊の多くは破壊され、末寺の来迎院に移された。阿夫利神社祠官には権田直助を迎え、近世以来の大山寺を中心とする体制は神社主導の体制へと変わり、御師の呼び名も先導師へと改められる。

このように明治以降大山の体制は大きく変化し、東海道線の開通など参詣の交通手段も変化した。庶民の大山参詣は変わらず盛んに行われ、現在もひきつがれている。

2 大山関係資料の概要について

資料総数は現在のところ110点あまりで、地域資料という性格上、絵図、軸物、刷り物、草双紙、和装本、パンフレット等、形態は様々である。基本的に『吾妻鏡』や『相模国風土記稿』といった史料や地誌、その他の大山に関する研究書などはここに含めていない。明治以降の資料が多くをしめるが、それより前の年代のものも30点ほどある。ここで主だったいくつかの資料を紹介したいと思う。

2.1 役者絵

①『大山参り菊松』『滝元のおやま』『大山参り升右衛門』『大山参り米次』『大山参り扇吉』『大山参り嘉吉』の6枚はいずれも明治13年（1880）6月に東京新富座で上演された清元浄瑠璃『首尾四谷色大山（しゅびもよつやいろにおおやま）』の役者絵である。

河竹黙阿弥が65歳の時新富座に書き下ろした作品で¹⁾、配役は菊松に尾上菊五郎（5代?）、おやまが岩井半四郎（8代?）、升右衛門が市川団十

郎（9代？）、米次（台本では小太夫）が市川小団次（5代？）、扇吉（台本では宗次）が中村宗十郎（初代？）、嘉吉が坂東家橘（初代？）である。夏の上演ということで、大山まいりをあてこんだ大切浄瑠璃であったという。



図1 大山参り菊松



図2 滝元のおやま



図3 大山参り升右衛門



図4 大山参り米次



図5 大山参り扇吉



図6 大山参り嘉吉

絵師は守川周重²⁾（生没年不詳）。豊原国周の門人で、役者絵・芝居絵、絵入新聞や小説の表紙・挿絵を手掛けている。版元は福田熊次郎（？-1898）商号は具足屋。小林清親や国周等の版元として知られ、『ニュースの誕生』（木下直之ほか編 東京大学総合研究博物館 1999 p. 237）によれば『東京日々新聞』を素材にした新聞錦絵の版元でもあった。

当室では6枚しか所蔵していないが、都立中央図書館ではこのほかに『大山参り蔦蔵』を所蔵している³⁾。絵師も版元も同じであり、1セットとして作成されたものと思われる。また、この『首尾四谷色大山』には、同じ

守川周重による3枚続きの画の個人蔵も確認されている。(『伊勢原市史』通史編近世 p. 577)

②『當盛五人揃肌競(とうせいごにんぞろいはだくらべ)』は元治元年(1864)に上演されたと思われる演目の役者絵である。演目の名は残念ながら不明である。



図7 『當盛五人揃肌競』

中村芝翫(4代?)、市村家橘(4代?)、河原崎権十郎(初代?)、沢村田之助(3代?)、坂東彦三郎(5代?)と思われる5名が滝を背景に木太刀と共に描かれている。画中には「元治元年吉祥日成 大当板本勝利(?) 君喜」「奉納大山石尊大権現」という文字が見える。

絵師は豊原国周(1835-1900)。豊原周信、歌川国貞(三代豊国)の門人で、役者大首絵・役者似顔絵・美人画などを描いている。版元は辻岡屋文助(天保~明治)。辻岡氏は嘉永5年(1852)地本草紙問屋本組株を譲りうけている。

個人蔵(『伊勢原市史』通史編近世 p. 584)と都立中央図書館での所蔵が確認できる。

2.2 大山を描いた絵

①『相模国大隅郡大山寺雨降神社真景』は、江の島から富士山まで背景に収めた大山全景の図であり、大勢の参詣者も描かれている。安政5年(1858)の作とされ、石尊社や大山寺不動堂などが描かれている。

絵師は五雲亭貞秀(1807-?)。歌川国貞(三代豊国)の門人で幕末から

明治にかけて鳥瞰図、一覽図を描き、横浜絵の代表的な絵師である。版元は両国広小路の林屋庄五郎。神奈川県立歴史博物館、同県立金沢文庫、伊勢原市教育委員会、東海大学付属図書館などの所蔵が確認できる。

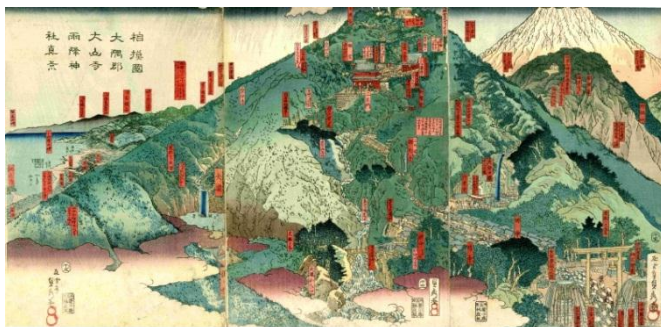


図8 『相模国大隅郡大山寺雨降神社真景』

②『九月九日相模國大山阿夫利神社例祭神輿御渡之圖』は神社例祭の祭礼行列を描いたものである。5枚続きで明治15年(1882)に作成されている。

絵師は歌川広重(3代 1842? - 1894)。初代広重に入門し、慶応初年から明治へかけ、横浜絵・東京名勝絵・文明開化絵・諸国物産絵を制作している。



図9 『九月九日相模國大山阿夫利神社例祭神輿御渡之圖』

版元の二階堂若満は平田家(国学)に入門した大山の御師(先導師)である(『伊勢原の歴史』5号 伊勢原市 1990 p.60)。二階堂氏が講中の

代表者などに配ったものかと推測され、個人蔵も確認できる。（『伊勢原市史』通史編近世 p. 554、p. 589）

2.3 双六

『鎌倉江ノ島大山新版往來雙六』は往路が江戸日本橋から、保土ヶ谷、戸塚、鎌倉、江の島、藤沢、田村の渡し（相模川）等を通って大山へ、帰路が矢倉沢往還で厚木、鶴間、長津田、二子（多摩川）、三軒茶屋等を通って日本橋へという六泊七日の行程で構成された、全52コマの道



図10『鎌倉江ノ島大山新版往來雙六』

中双六である。各コマのなかには、名物や道案内などが記されている。撰者の柳亭種彦⁴⁾（1783－1842）は江戸時代後期の戯作者である。旗本の家に生まれ、烏亭焉馬（うてい・えんば）らに師事し『修紫田舎源氏』で第一人者となるが、天保の改革により咎めを受ける。

絵師は前北斎為一、すなわち葛飾北斎（初代 1760－1849）である。江戸本所に生まれ、勝川春章に師事。その後さまざまな画風を学び、独自の画境に至った。版元は上州屋重蔵（天保～明治）。商号は錦重堂。江戸人形町の地本草紙問屋で団扇問屋も兼ねていた。

2.4 刷り物

①『相州大山繪圖』は大山寺入口から石尊宮に至るまでを描く山内の案内絵図である。刊行年は記されていないが、『近世武相名所めぐり』（神奈川県立博物館 1991）によると、寛政7年（1795）以降の出版であるという。また石尊・大天狗・小天狗・大山寺等、神仏分離以前の状況が描かれているので、江戸時代の刊行と思われる。

版元は佐藤坊。おそらく大山の御師で、参詣者に配布したものだと推測される。神奈川県立金沢文庫での所蔵が確認できる（『描かれた寺社』神奈川県立金沢文庫 2008 p. 18）。同じく佐藤坊開版の大山の絵図としては、

国立公文書館内閣文庫所蔵の「相州大山之絵図」が確認できる⁵⁾。



図 10 『相州大山繪圖』

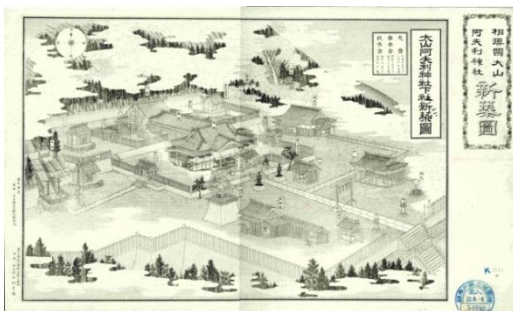


図 11 『相模國大山阿夫利神社新築圖』

②『相模國大山阿夫利神社新築圖』は大山阿夫利神社下社が描かれた銅版画である。刊行年は記されていないが、下社が建立されたのは明治6年(1873)なのでそれ以降と考えられる。

製図は手中明王太郎景元(てなか・みょうおうたろう・かげもと 1819-1906)。明王太郎は、『新編相模国風土記稿』によれば、大山寺創建の際の棟梁であり、それ以後代々この名を継いで大山寺の大工として勤めてきたという。手中明王太郎文書は神奈川県立公文書館に寄託されている⁶⁾。

版元の晴雲閣は、中村月嶺(1846-1922)が京橋に開業した印刷所である⁷⁾。月嶺は江戸生まれで狩野派の絵師・樋口探月斎に師事。明治5年(1872)、薩摩藩の御用絵師であった柳田龍雪から銅版技法を学び、翌年龍雪とともに紙幣寮に勤務。最後の手彫り切手といわれる「鳥切手」三種の原版を彫刻している。紙幣寮退職後に晴雲閣を開業している。

2.5 草双紙

①『大山道中栗毛後駿足(おおやまどうちゅうくりげのしりうま)』は膝栗毛物の滑稽本の一つで、大山参詣を背景としている。浅草八丁堀に住む百福屋徳郎兵衛とその子分福七を主人公とした滑稽道中話であり、柳亭種彦が序文を寄せている。文化14年(1817)から文政5年(1822)頃に連玉堂から刊行された三編六冊から成るが、当室で所蔵しているのは初編・二編の4冊のみである。

『大山道中栗毛後駿足』三編の翻刻と解説」（鈴木圭一 國學院雑誌 94(1) 1993)によると、国立国会図書館（初編のみ）、國學院大學図書館（初・二・三編揃）がそれぞれ初印本を所蔵しているが、本室所蔵資料は巻末に錯簡があり後印本と思われる、とされている。なお、天保3年(1832)ごろに『大山道中膝栗毛』と改題・改刻されている。



図13 『大山道中栗毛後駿足』

作者は瀧亭鯉丈（りゅうてい・りじょう ?-1841）⁸⁾。江戸時代後期の滑稽本作者であり、「花暦八笑人」「滑稽和合人」等の作品がある。人情本作者の為永春水が彼の弟だという説もあるが定かではない。

絵師は歌川国直（1795-1854）。初代歌川豊国の門人で役者絵・美人画・風景画・人情本挿絵・読本挿絵などを描く。戯作者春亭三暎の弟である。厚木郷土資料館での所蔵（初編）が確認できる⁹⁾。

②『大山道中膝栗毛』は弥次郎兵衛、喜太八両人が珍道中を繰り広げつつ大山に辿りつき、良弁（ろうべん）の滝に打たれて身を清め、無事江戸に帰り着くまでの物語である。



大山詣が庶民に広がるにつれ強まっていった物見遊山という傾向

図14 『大山道中膝栗毛』

がうかがえる。25丁。安政4年（1857）に刊行されている。著者の鈍亭魯文は仮名垣魯文（1829—1894）の別名である^{10）}。幕末～明治前期の戯作者、新聞記者。万延元年（1860）『滑稽富士詣』で世に認められ、『仮名読新聞』の編集にも携わった。主な作品は『西洋道中膝栗毛』『安愚楽鍋』など。絵師は一松斎芳宗（1817—1880）。歌川国芳の門人で、彩色の技に秀でていたという。

③『金草鞋（かねのわらじ） 箱根山七温泉江之島鎌倉廻』は東海道三島宿から箱根・大山を経て江の島・鎌倉・金沢をめぐる戸塚に至るまでの社寺、古跡めぐりを主とした道中紀行。『金草鞋』という全26編の23編と24編にあたる^{11）}。（異説もあり）

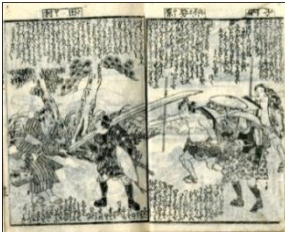


図15『金草鞋 箱根山七温泉江之島鎌倉廻』

初版は天保4（1833）年刊とされるが、当室所蔵本は明治の改編本と思われる、30丁で1冊本である。絵師名も初版の歌川国安から北尾美政と彫り変えられている。この北尾美政という絵師の詳細は不明である。

作者は江戸時代後期の戯作者十返舎一九（1765—1831）^{12）}。駿河生まれとされる。有名な膝栗毛ものをはじめとする滑稽本・洒落本・人情本・読本など多くの作品を執筆した。この作品は最晩年の作品であり、没後に刊行された。

2.6 川柳関係

『川柳大山みやげ』は江戸時代の大山参りを題材にした「古川柳」を、略解を添えて紹介しており昭和2年（1927）、坂本書店より刊行されている。編著者の安藤幻怪坊（1880—1928）^{13）}は香川県生まれ。横浜市の弘誓院（ぐぜいいん）の住職で僧名は玄戒。古川柳の研究者でもあり、『川柳歳時記』『謡曲と川柳』などを著した。

昭和32年（1957）に岡田甫（1905—1979）による再刊増補版が有光書房

から刊行された。また昭和44年(1969)にはこれを底本とし、大山寺の略史、開山の伝承・行事、御師と講との関係などをつけ加えて『相模大山と古川柳』(根本行道著)が刊行されている。



図16 『川柳大山みやげ』

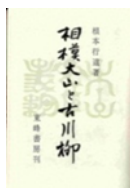


図17 『相模大山と古川柳』

2.7 案内記ほか

①『大山不動靈驗記』は大山寺塔頭養智院の前住職、心蔵が自らの見聞や御師等からの聞き取りをもとにしてまとめたものである¹⁴⁾。当室所蔵本は奥付が失われているが、他本の奥付によると、寛政4年(1792)刊行とされる。刊行にあたっては、大山に信仰心をもつ賛同者がそれぞれの祈願をこめて出資していることが15巻末の記載からわかる。全15巻から成り(当室所蔵本は合本されている部分もあるため8冊)、内容としては第1巻は良弁の略伝、大山寺事紀などであるが、2巻から15巻は大山寺不動明王の靈驗を収録している。

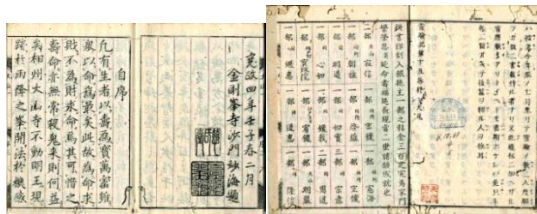


図18 『大山不動靈驗記』

②『大山名勝圖誌』は阿夫利神社の来歴や先導師の氏名、旅館などを紹介し、画も添えている。明治19年(1886)刊行。出版人は安田義明となっており、先導師の一員として書中に名前があがっている。

著者の安田米斎（1848－1888）¹⁵⁾は幕末～明治の画家、詩人である。相模出身。福島柳園らに文人画を、大沼枕山に詩文をまなんだ。慶応3年(1867)相模高座郡の瑞光寺の住職となり、のちに神奈川県庁に勤務した。内国絵画共進会（官催の日本画展）などで受賞している。他に、『杉田梅花村誌』『江之島誌』などの著作がある。



図19 『大山名勝圖誌』



図20 『天狗講大山詣』



③『天狗講大山詣』は著者の紫江が昭和31年5月26日に催された天狗講発会式に参加し、その模様を中心に、大山の沿革、天狗講の様子等を歴史的考察を加えて随筆風に記したものである。限定50部。昭和31年(1956)刊。ここでいう天狗講とは大正・昭和期の漫画家、随筆家、社会評論家である小生夢坊（1895－1986）¹⁶⁾を初代総講元とする文化集団である。

『続 愛書家の散歩』（斎藤夜居著 出版ニュース社 1984）によると、著者の磯ヶ谷紫江(1885－1961)は判事の子として栃木県に生まれている。日大法科を卒業し、法官庁の執達吏として勤務しながら、墓蹟研究、そば研究、など趣味をきわめた。趣味生活を結集した個人雑誌「紫江帖」を刊行。戦後は経済的に恵まれず不遇だったという。

2.8 権田直助関係資料

権田直助（ごんだ・なおすけ 1809－1887）は幕末・明治前期の国学者・神道家・医師である¹⁷⁾。武蔵国入間郡（現在の埼玉県）に医師の子として生まれ、江戸で漢方医学を学び、帰郷して診療にあたる。29歳の時、平田篤胤門に入り、国学を学び古医道のために尽力する。文久2年（1862）京都に上り、尊王討幕運動に奔走する。その姿は『夜明け前』（島崎藤村著）

にも描かれている。維新後、大学中博士などに任じられるが、明治4年(1871)国事犯の疑いで幽閉される。

赦免後、請われて明治6年(1873)7月より大山阿夫利神社の祠官となる。その激動の生涯の最後の十余年を大山で過ごし、この地で没した。その間、神社社務の体系化、大山講社の組織化、神道祭祀の確立、神教歌の作成と普及等に努めた。また生徒寮を建設し全国から若者を集め、多くの門人を育てた。門人には井上頼圀・逸見仲三郎・下田義照などがある。

①『報徳集成大山敬慎講社規則』

従来大山講を母体にして、権田が新たに設立した敬慎講社の規則集である。敬慎講社の指定旅館の規則集ともいえるべき『大山敬慎講社定休泊所規則』も併せて綴じられている。



図 21 『報徳集成大山敬慎講社規則』



図 22 『大山敬慎講社定休泊所規則』

②『神教歌譜』

権田が定めた祭祀・葬儀・霊祭などの式中・式後に謡う歌譜¹⁸⁾。敬神

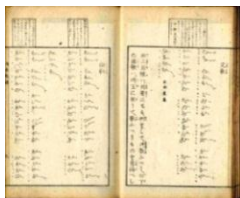
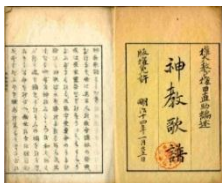


図 23 『神教歌譜』

尊皇愛国に関する適切な古歌を選び出し、直助が音節を付した譜を作り拍子も定めた。明治14年(1881)刊。

③『葬儀式附圖』

葬儀式のうちの一冊。本編で述べた葬具の製法等を図で示したもの。

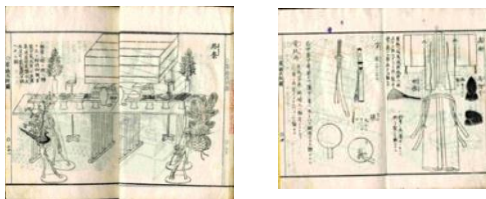


図24 『葬儀式附圖』

権田直助がさまざまな史料や式典を参考にして編成した、神道での葬儀の儀式が記されている。明治20年(1887)刊。



図25 『詞能眞澄鏡』

④『詞能眞澄鏡』

権田は幽閑中に国語学の研究に専念している。これは名詞および副詞を分類してその性質と種類とを明らかにしたものである



図26 『刪定神遺方』

⑤『刪定神遺方（さんていしんいほう）』

神遺方（日本最古の薬方書）の脱漏誤謬を校合したもの。明治3年(1870)刊？

2.9 その他

①『大山詣入墨絵千社札集』は4枚の千社札を貼った小冊子である。江戸彫勇会の納札集(大正14年8月)の一部と思われる¹⁹⁾。

江戸彫勇会は明治35年(1902)に神田彫勇会として創立され、明治45年(1912)に参加者の広がりにより江戸彫勇会と改められた、刺青を入れた



図27 『大山詣入墨絵千社札集』

人々（愛好家）の親睦団体である。推理小説作家高木彬光の『刺青殺人事件』にも描かれている。『刺青』（斎藤卓志著 岩田書院 1999）によると、江戸彫勇会は大山阿夫利神社裸詣りを年1回行っており、同書には平成6年（1994）のその様子も紹介されている。

画家の稲垣蝸堂（いながき・かどう 生没年不詳）は明治・大正期の画家・挿絵画家である。『図説絵本・挿絵大事典』第2巻（川戸道昭ほか編著 大空社 2008）によると、挿絵をつけた資料としては『猛獣狩』（青葉山人著 明治44年）、『牡丹燈籠』（村田天籟著 大正15年）、画集としては『日露戦争漫画』『善悪二人少年』『飛行機大会』などが確認される。

②『小田原急行鉄道沿線名所案内』は小田原急行沿線の名所を描き出した鳥瞰図で、中央に富士山に抱き込まれるように大山が大きく描かれている。昭和2年（1927）の刊行と思われる。

作者は吉田初三郎²⁰⁾（1884—1955）。京都生まれ。友禅図案師などに奉公し、鹿子木孟郎に師事し洋画家を志すが、師の助言により、商業美術に取り組んだという。



図28 『小田原急行鉄道沿線名所案内』

③『宝珠山大堂向拝天井勾欄増築趣意書』中、愛甲、高座三郡台帳写
（付：不動堂向拝等増築ニ付寄附金

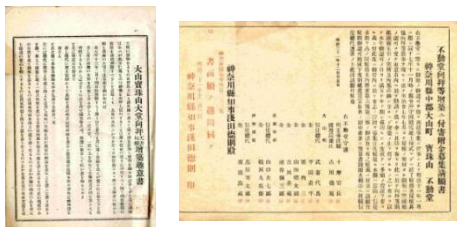


図29 『宝珠山大堂向拝天井勾欄増築趣意書』

募集請願書（明治31年）1枚』は、安政の大火で焼けた大山寺大堂の再建で、最後まで残った向拝天井勾欄の普請のための募金の趣意書と、中郡・愛甲郡・高座郡の募金者の台帳である。

④『相州大山寺洪鐘改鑄募縁疏』は更に古く、天保12年（1841）に大山寺別当知事識

によって著された、不動堂の洪鐘の改鑄のための浄財を求める文書である。



図30 『相州大山寺洪鐘改鑄募縁疏』

おわりに

今回の調査において痛感したことは、資料の保存の大切さと難しさである。明治期以前の資料はいうまでもないが、大正時代の資料でも間もなく百年近くを経過した資料となる。時の経過とともに資料が劣化していくことは避けられないが、少しでもよい状態で保存できるよう手をつくすことも、図書館の大きな役割であろう。かながわ資料室のように様々な形態の資料を所蔵する場合は、なおさらである。限られた予算と人員とでは難しいことであるが、細やかな心配りが望まれる。

なお、今回は調査途中の報告であり、かつ宗教・美術・文学・歴史等いずれの分野においても専門の研究者ではない一司書による調査ということで、誤りもあることと思う。誤りについてはご指摘をいただければ幸いです。

注・引用文献・参考文献

- 1) 河竹黙阿弥著. 河竹繁俊校訂. 黙阿弥全集第20巻. 春陽堂, 1926, p. 794-805
- 2) 日本浮世絵協会原色浮世絵大百科事典編集委員会編. 原色浮世絵大百科事典第2巻. 第3巻. 大修館書店, 1982, による。

以後特記しない限り、絵師、版元の記述は同資料による。

- 3) 東京都立中央図書館“貴重資料画像データベース” 東京都立中央図書館 2010. 3
<http://metro.tokyo.opac.jp/tml/tpic/>, (参照 2010-09-01)
- 4) 国史大辞典編集委員会編. 国史大辞典第 14 卷. 吉川弘文館, 1993, p. 611
- 5) 伊勢原市. 伊勢原市史 通史編 近世. 伊勢原市, 2010, p. 590
- 6) 神奈川県立公文書館. 手中明王太郎文書の世界-景直と景元-. 神奈川県立公文書館だより. 1998, 第 5 号, p. 2-3
- 7) 森登. 銅・石版画万華鏡 33 中村月嶺《書肆 有隣堂穴山篤太郎》. 日本古書通信. 2010, 第 970 号, p. 41
- 8) 国史大辞典編集委員会編. 国史大辞典第 14 卷. 吉川弘文館, 1993, p. 611
- 9) 品川区教育委員会編. 品川の大山信仰. 品川区教育委員会, 2009, p. 43
- 10) 国史大辞典編集委員会編. 国史大辞典第 3 卷. 吉川弘文館, 1983, p. 444
- 11) 十返舎一九著. 林美一校訂. 金草鞋. 河出書房新社, 1984, p. 68-85
- 12) 国史大辞典編集委員会編. 国史大辞典第 6 卷. 吉川弘文館, 1985, p. 895-896
- 13) 東野大八著. 田辺聖子監修・編 川柳の群像. 集英社, 2004, p. 35-37
- 14) 圭室文雄. 「大山不動靈験記」にみる大山信仰. 郷土神奈川. 1986, 第 18 号, p. 8-27
- 15) 上田正昭ほか監修. 日本人名大辞典. 講談社, 2001, p. 1938
- 16) 近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編集. 近代日本社会運動史人物大事典 2. 日外アソシエーツ, 1997, p. 514
- 17) 国史大辞典編集委員会編. 国史大辞典第 6 卷. 吉川弘文館, 1985, p. 90
 国学院大学編. 皇典講究所草創期の人びと. 国学院大学, 1982, p. 122-131
- 18) 埼玉県教育会編. 徳育資料 第 2 編. 埼玉県立浦和図書館, 1980, p. 158-180
 以下③④⑤の資料についての解説も同資料の記述による。
- 19) 天野屋 “納札集 大正十四年 八月 江戸彫勇會” 神田明神界限アーカイブ
 2010. 8 <http://kaiwail.amanoya.jp/> (参照 2010-11-2)
 “私のすきなモノ「納札物語」拾遺” 四行詩集日乗 2010. 11
http://blog.goo.ne.jp/rubaiyat_2009 (参照 2010-11-2)

- 20) 堺市博物館編集. パノラマ地図を旅する-「大正の広重」吉田初三郎の世界-.
堺市博物館, 1999, p. 49-53

主要参考文献

- 『伊勢原市史 資料編 古代・中世』 伊勢原市 1991
『伊勢原市史 資料編 続大山』 伊勢原市 1994
『伊勢原市史 通史編 近世』 伊勢原市 2010
『神奈川県の名 (日本歴史地名大系 14)』 平凡社 1984
『郷土資料解説目録 1』 神奈川県立図書館 1960
『郷土資料解説目録 2』 神奈川県立図書館 1966
『大山信仰』 圭室文雄編 雄山閣出版 1992
『相州大山』 内海弁次著 神奈川新聞社 1996
『大山史年表』 大山寺 1986
『特別展 大山道と大山信仰』 世田谷区立郷土資料館 1985
『品川の大山信仰』 品川区教育委員会 2009
『大山詣と石尊大権現 2010年度常設展示解説資料』 神奈川県立公文書館 2010
「古記録からみた大山信仰の諸相」 川島敏郎 『神奈川県立公文書館紀要』 6号,
2008, p. 302-324
『武相膝栗毛』 神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 1983
『皇典講究所草創期の人びと』 国学院大学 1982